

# Tempus et Aduerbum Temporale

加藤 武

## 目次

序章 問題の所在

第一章 Tempus: Dionysius Thrax

第二章 Aduerbum temporale: "sero te amauit" (Augustinus, *Confessions* 10.27.38)

結論

## 序章 問題の所在

Tempus (時制) とはなにか。ストア派の文法家ディオニシウス・トラクス (Dionysius Thrax) の断章を手がかりとして考察する。つぎに、述語動詞と時間副詞の関係はどの

ようなあいだがあるか。アウグスティヌス『告白』の一節 "sero te amauit" について考察する。

第一章 Tempus: Dionysius Thrax

アレクサンドリアの文法家ディオニシウス・トラクス (170-c. 80 B.C.) は *Techné Grammatiké (Ars Grammatica)* において時制の定義をのべている。

【テキストA】

三つの時制 *chronos* がある。

現在 *enhestos*、過去 *parelytos*、未来 *melon*。<sup>(1)</sup>

この時制の三分法 trias は「時の反省の定数」*eine Konstante in der Zeit-Reflexion* といわれる。<sup>(2)</sup> このことはハーロルト・ヴァインリヒが言うように世界共通かどうかはしばらくおき、すくなくともインド・ヨーロッパ語については妥当する。カッシキアクムの山荘で *De Grammatica* を書いた初期のアウグステイヌスも、三分法を動詞時制 *tempora verborum* の基本的な定義としている。

*Tempora verborum tria sunt: praesens, ut scribo, praeteritum ut scripsi, futurum ut scribam.*<sup>(3)</sup>

マイク・オーブリーも指摘するように、<sup>(4)</sup> *enhestos* が、西欧の近代語 *now, maintenant, nun, adesso* などと異なり、いまここにある現前性 *presence* を表すのでなく、過去から未来への連続性 *continuity* を表わすことに留意しよう。たとえば日本語の場合、過去または未来と対比して「いま」というとか、いまとくらべて、「いにしえ」、「むかし」、「ゆくすえ」などとという単独表現、あるいは、「こしかた・ゆくすえ」という二分法の表現はあっても、「むかし・いま・ゆくすえ」と三つならべる時制表現は皆無では

なからうか。アウグステイヌスは、ディオニシウス・トラクスが次のパラグラフでのべるような下位の区分「種差 *diaphora*」についてはまったく言及していない。ディオニシウス・トラクスはつづけて言う。

これらのなかで、過去は四つの下位区分 *diaphora* をもつ。

未完了 *paratiktos*

完了 *paracheimenon*

過去完了 *hypersyntelikon*

アオリスト (*aoriston*)。

これらは三対の相互関係 (*syngeneia*) をもつ。

現在対未完了の *enhestou pros paratiktou* の、

完了対大過去 *paracheimenou pros hypersyntelikon* の、

アオリスト対未来の *aoriston pros mellonta* の。<sup>(5)</sup>

六世紀にアレクサンドリアで言語学を教えたカエサリアのプリスキアヌスは *Institutio de Arte Grammaticae* において時制を定義している。これをさきのディオニシウス・トラクスの定義と比べよう。

【テキストB】

時制には三つある。

現在 praesens

過去 praeteritum

未来 futurum。

だが過去はさらに三つに分けられる。

未完了過去 praeteritum imperfectum

完了過去 praeteritum perfectum

大過去 praeteritum superperfectum。<sup>(6)</sup>

【テキストA】と【テキストB】はほとんど一致する。ただし、プリスキアヌスには【テキストA】でみた対立項 *pros* のするどい認識が欠如している。数世紀の時をへるにつれて摩滅したのかもしれない。ディオニシウス・トラクスは、時制を多くの文法家のように形態論的、音韻論的に観察するだけでなく構造的にとらえている。

アルニム編『初期ストア派断片集』第二巻におさめられたクリュシッポスの「時間について」の断片群は無原則的な資料収集ではない。<sup>(7)</sup> その点で、ルドルフ・シュミットが書いた僅か七六頁でありながらも体系性をもつ小著

*Stoicorum Grammatica* <sup>(8)</sup> にすら劣るとマイケル・フレデーはきびしい。<sup>(9)</sup> しかしさいわいにも、クリュシッポスが集めた時制についての大部の資料 *scholia* が残っていて、ほぼ続きにあたる部分を記している。まず原資料の欄外にだれかがコメントを書き、さらに成立年代はわからないがステファヌスがコメントに注釈を施す、という仕方 で成立した(以下「集成」と呼ぶ)。では「集成」を考察しよう。

【テキストC】

ストア派の人々は、現在形 *enhestos* を「延長する現在」*enhestota paratitikon* と定義している。なぜなら、それは過去に向かつても *eis* [*parelytho te kai eis*] 未来に向かつても *eis melionta* 延びているからである。つまり「わたしは行う *poio*」と語る人は、「何かを行なったこと *epoiese*」と「何かを行なうだろうこと *epoioin*」と含意しているのである。<sup>(10)</sup>

【テキストC】のキーワードは *paratitikon* である。これを水落健治は延びるといふ意味で「延長する」と訳す。次のパラグラフでは、「持続する」と訳し変える。これは

paratation の二重の含意を讀者に伝えるための訳者の適切な配慮による。これを六世紀ラテンの文法家カエサリアのプリスキアヌスの時制に関する定義と比べてみよう。ギリシャ世界からラテン世界へと数世紀を隔てるとはいえ、上に掲げたディオニシウス・トラクスの時制に関する言明とあわせてみると、われわれの理解に資するから。

### 【テキストD】

その一部が過ぎ去ったがその(他の)部分がまだ来ていない時は、本来的に proprie 現在時制 tempus praesens といわれる。つまり時は水流のちまび fluvii more (よどぎ)となくたゆみなく流れて instabili cursu 渦巻く volatur と(時は)現在 in praesenti のなかに、すなわち瞬間のなかに instanti 点 punctum をもつことなどおよそありえないからである。<sup>(11)</sup>

さらに52節で言う。

だから過ぎ去った時 praeteriti temporis とこれから来る時 futura を、毫もとぎれることなく nulla

intermissione 一点のように quasi uno puncto まとめて continet 結びあわせる coniungat……とき、これを現在時制 praesens tempus とよぶ。<sup>(12)</sup>

前者(51節)をディオニシウス・トラクスの定義、「ストア派の人々は、現在形 enhestos を「延長する現在」と定義している」と比べあわせると、現在は過去と未来に伸びる二方向性をもつことが明らかになる。この点でディオニシウスとプリスキアヌスはみごとに一致する。プリスキアヌスは、52節で言う。

時は……毫もとぎれることなく nulla intermissione 一点のように quasi uno puncto まとめてあげ continet 結びあわせる coniungat。<sup>(13)</sup>

51節では時の過去から現在へ、現在から未来へ流れてやまない流動性をみごとな隠喩で示し、52節では過去と現在を一点のように結合し、統一する統合機能をもしめている。これはディオニシウスにみることでできない、もうひとつの視点である。

## 【テキストE】

また彼らは、未完了過去 *paratitikon* を「持続的な過去 *paratitikon paroiemenon*」と定義している。つまり「わたしは行なっていた *epioun*」と語る人は、多くのこと *to pleon* を行なった *epioun* がいまだ *oupo* 完成してはおらず *pepleloken*、更にわずかの時間 *en de oligo chronoi* 「行なうだろう *poisei*」ということを含意しているからである。なぜなら、過去のこと *paroiemenon* が多い *pleon* のであれば、残り *leipon* はわずか *oligon* だからである。そしてこのわずかなものを捉えたとき *proslēthen*、その人は完全な過去 *teleios parochekos* である「わたしは書いてしまった *gegrapha*」を発するだろう。これは完了形 *parakeimēnos* と呼ばれているが、それは行為の完成 *to plesion synteleian* がほとんど(そこ)にあるからである。(以下省略)<sup>(14)</sup>

マイケル・フレデーはストア派の時制に関する卓越した論考において、ステファヌスが現在と過去について *paratitkos-syntelikos* と対比していることに着目して言う。

これはストア派の人々が多かれ少なかれ思弁的に *speculatively*、多かれ少なかれ独創的に *ingeniously* ストアの時制の分類を再構築しようとしてつとめたことの主要なあかしである。<sup>(15)</sup>

ストア派のひとつが現在と過去を不完全と完全という対立項に設定したのは、言語の注意深い観察によつてでなく、<sup>(17)</sup> アスペクトという観点からである(マックス・ポールのツはヘブライ語の影響を想定する)。ここでテンスとは過去・現在・未来という時の流れを表現するのたいし、アオリストは動きの時間的展開を表現する述語形式をいう。<sup>(18)</sup> マイケル・フレデーはさらに不完全・完全という区別は命題 *proposition* が不完全 *imperfective* であるか、完全 *perfective* であるかを問う論理的かつ哲学的な区別によると言う。その根拠はこうである。<sup>(19)</sup>

(i) アリストテレスはすでに、『命題論』において時制と命題の真偽との関係についてのべている。

ところで現在あるものどもや過去にあったものども

においては肯定、あるいは否定は必ず真、さもなければ、偽でなければならない。……しかし個別的なもので、そして未来にあるものどもについては同様でない。<sup>(20)</sup>

(ii) クリュシッポスは現存しないが *Peri syntelikon axiōmatōn* という表題の書物を書いたとされる。

(iii) 現在、過去、未来にかかわる命題のあいだに論理的根拠にもとづいて区別をもうけたのは紀元後一世紀の文法家ディオドロス・シクルスである(筆者は未見)。

ストア派の文法家たちの時制の透徹した理解は、さきに指摘したように、ラテン語圏の 아우グステイヌス *De Grammatica* では、文法學から修辭學、詩學、音樂論への関心のうつりゆきも背景にあるとしても、消えている。ディオニシウス・トラクスに戻ろう。現在時制、過去時制ときて、結びにのべるのは、未来時制とアオリスト形についてである。このパラグラフは対立項を述べてきたパラグラフと微妙に調子が異なる。ここではもはやテンソス・アスペクトという水平的な地平をこえてより高次な地平に達しているようだ。

#### 【テキストF】

また、アオリスト形 aoristos は「不定性 aorista」という点で未来形 *toi mellonti* と同類である *syngenes*。すなわち「わたしは行なうだろう *poiesō*」[未来]の、未来の長さ *to poson tou mellonti* が不定 aoriston であるのと同様に、「わたしは行なった *epoiesā*」の過去の長さ *to tou parōkemenou* は不定なのである。<sup>(21)</sup>

つまり要約すると二つのことを述べている。

(1) アオリスト形が不定であること。

(2) アオリストは過去に属する。

これを時制移行 *Tempus-Übergang* (ハーロルト・ヴァインリヒ) の具体例として見ることができる。

したがって、アオリスト形に aoriston 「今 arti」という語が付加されると完了形 *parachēimenos* となり……たとえば「わたしは今行なった *epoiesā arti*」わたしは行なった *pepoieka*」アオリスト形に *tou* 「かつて *palai*」という語が付加されると過去完了形 *ho*

prosomenou sypersynthikos となる。(以下省略)<sup>(22)</sup>

アオリストの不定性 aoristia をテンスという定性に変更するためには時間副詞を添えてやりさえすればよい。そうすれば「完了と大過去の間に位置するアオリスト形は機械的に過去のテンスになる」<sup>(23)</sup>。プリスキアヌスは『アエネーイ』に典拠しつつアオリスト形について言う。

Troiaequ venit ab oris

Italian fato profugus,

Lainaque (Lainiaque) venit.

venit は uenerat にあたる。というのは、事実 Aeneas がイタリアにかなり前に到着したことを意味しているからである。だから過去完了 praeteritū perfecti の意味 us を本来的に proprie 考えたと、これこそギリシヤ人がまさしくアオリスト aoriston とよぶものをさしている。<sup>(24)</sup>

アオリストのもう一つの特徴である不定性はすっかり消えている。サラ・エーコ・コンティは、これまで紀元前二世

紀初期の制作といわれる *Techné Grammatiké* の制作年代をそれより後の時期にひきさげる。その上で、

このテキストはアポロニオス・デイスコロスの仕事とならんでギリシヤ語文法の最も重要な資料を表現している。<sup>(25)</sup>

といい、ディオニシウス・トラクスはテンス・アスペクトという観点から時制をみているが、これにたいし、アポロニオスは時制をムード(表現者の判断や評価を表す表現形式)という角度から見ているという。アオリストについての両者の見解の相違に注目するのはアンドリュウ・ベルである。*The Greek Aorist* において、ディオニシウス・トラクスはアオリストを過去に帰属させたが、アポロニオスは現在に帰属させる、とのべている(アポロニオスの時制観についての検討は他日の課題としたい)。<sup>(26)</sup>

マイケル・フレデーはストア派のアオリストに触れる資料が乏しいことを嘆きつつ、アオリストの三つの特徴をあげる。

(i) アオリストは完成した行為 the completed action、

あるいは全体としての行為 *the action as a whole* にかかわる。<sup>(27)</sup>

(ii) ストア派は、過去・現在・未来の区別と完全・不完全というふたつの区別だけでなく、第三の区別を考えた。<sup>(28)</sup>

(iii) アオリストという語自体 *aoristos chronos* が、アオリストの不定性 *indetermination, aoristia* を示す。

フリーデは論考の末尾で言う。

*Its indeterminateness now, as we have seen, is understood as the indefiniteness into the distance into the past.*<sup>(29)</sup>

これはアオリストの過去への所属という定性を超えるアオリストの不定性についての示唆ではないか。プリスキアヌスはアオリストの説明にあたって『アエネーイス』に典拠しつつ論をすすめ、語りの時におけるアオリストの役割を示していた。この点で *gnomic aorist* からアオリストの呪術的な出自を想定する坂部恵の仮説は興味深い。<sup>(30)</sup>

アオリストは、その後も広い地域で長期にわたって用いられた。一例をあげよう。木村彰一によると、<sup>(31)</sup> 典札や福音

書の典雅な文語としてアオリストが使われている。木村は、

アオリストは過去に行われた動作を単に報告する語りの時制、未完了過去は過去に行われた動作に付随して存在した状況を「描写する」話しの時制である。従って過去におけるストーリーの進行はもっぱらアオリストによって行われる。

と云い、用例として『マルコ福音書』2・13—14をあげる。

そしてイエスは海の方へ「出て行った *idize* (アオ、完 *exleithen, ao*)」。すると全群衆が彼の方へ「行き *ideaze* (未完過、不完 *erheto, impf.*)」彼は彼らを「教えた *ucasec* (未完過去、不完 *ediseksen, impf.*)」。そしてイエスは、そばを通りながら、アルパヨの子レビが収税所にすわっているのを「見て *vide* (アオ、不完 *kathemenon, part. pres.*)」わたしについて来いと言った。すると彼は「立ち上がって *gigola* (アオ、不完 *anastas, part. ao*)」彼に「ついて行った *ide* (アオ、完 *ekolouthesen, ao*)」。<sup>(32)</sup>



『マルコ福音書』2・13-14におけるアオリスト・未完了過去の関係を見ると、ハーロルト・ヴァインリヒが物語の浮き彫り付与の実例としてあげるアルベール・カミュ『正義のひとびと』における単純過去 *passé simple* と半過去 *imparfait* の関係とあまりにも酷似しているのにおどろく。

その人は、神さまと、草原であうことに「なっ  
たんだ(半過)」。そこで「急いで行っていた(半過)」、  
途中で一人の百姓に「出会った(半過)」。その百姓の  
荷車がぬかるみに「はまっていたんだ(半過)」。そ  
こでドミトリ聖人はこの百姓の「手助けをしてやっ  
た(単・過)」。ぬかるみは泥々で「深かった(半過)」。  
それで一時間も悪戦苦闘「しなければならなかった  
(単・過)」。やっとのことでそれが「終わる(前過)」  
と、ドミトリ聖人は約束の場所に「駆けつけた(単・  
過)」。ところが神さまはもうそこには「いなかっただ  
だ(半過)」。

ヴァインリヒは『時制論』で言う。

物語の中心部は半過去で記され、付帯状況を示すの  
には、単純過去が用いられている。<sup>(33)</sup>

『マルコ福音書』2・13-14で、イエスとペテロの働きを  
示す動詞にはアオリストが使われ、『正義のひとびと』で  
神さまとドミトリ聖人の働きを示す箇所では、単純過去が  
つかわれている。このようにアオリストがもつ物語機能は  
うたがうべくもない。十世紀、とくに十一世紀中葉以降に  
あいついで発見された写本は、アオリストが、ブルガリア、  
マケドニア圏において広く使われていたことを証している。

## 第二章 Aduerbum temporale: “sero te amauī”,

Augustinus, Confessiones 10.27.38

(1) amauī:

【テキストG】

1 sero te amauī

2 pulchritudo tam antiqua etiam noua.

### 3 sero te amau!

古くして、新しき美よ。おそかりしかな。

御身を愛することのあまりにもおそかりし。(山田晶

訳)

おそかった。わたしがあなたを愛したのは、かくも古くかくも新しい美よ。

おそかった。わたしがあなたを愛したのは。(松崎一平訳)

ラテン語の完了過去が印欧語の現在完了とアオリストを融合したものと見方は、現代のラテン文法家において認められている見解である。ここでいう *amau* は、アオリスト的完了 Aoristisches Perfekt である。

#### (2) sero:

ピエール・クルセルは「Le Thème de Regret: «Tard je t'ai aimé, beauté» (Augustin, Conf. X 27, 38)」という不朽の記念碑ともいへべき論考を記している。<sup>(37)</sup> *sero//te//amau* という三つの単純な単語のおびる濃密な含意を哲学史的、文学史的なという二重の観点から考察し、その引用の範囲は

広大で三世紀のプラウトウスから十九世紀初頭のサント＝ブーヴに及び、次のように結ぶ。

まず、ラテン的伝統……は、とり返しつかないという感情 *le sentiment de l'irreparable* を生き生きと感得している。つぎにギリシヤ的伝統……はプラトンのエロースとカロンへのあこがれを反映した。文学的と哲学的というこの二重の文化、この二つの伝統を、個人的な情緒という合流点に流しこみ、雅歌の花婿が示した多義的な遅延 *délais* を前にした魂のじれったさ *l'impatience de l'âme* を、自らのすぎさった過去にあてはめたのは、アウグステイヌスにほかならない。<sup>(38)</sup>

この時間副詞 *sero* を時制と副詞との関係という視点から見るとどうか。ディオニシウス・トラクスは、*Techné Grammatiké* において言つ。

副詞 *epitrema* のなかのあるものは時を示す。「いま *nyñ*、そのとき *tote*、あらためて *autis*」。これに従属

するものとして、特定のとき、あるいは季節「今日 *semeron*、明日 *aurion*、ずつと *tophra*、しばらく *teos*、したとき *penika*」がある<sup>(38)</sup>。

ここで彼は時間副詞の語彙をあげているが、時制と時間副詞の関係にはふれていない。これにたいして、紀元後二世紀、アレクサンドリアに生まれローマで活動した文法家アポロニオス・デイスコロス<sup>(39)</sup>は、『命題論』において時制と時間副詞の関係について述べている。

しかしながら、ある副詞の組み合わせが、以上にのべた異なる時のセットに、さらに分割される。これらは異なる人称や数と自由に結びつく[*eg* 昨日私は書いていた *echthes egraphon*、昨日私は書いた *echthes egrapha*]がすべての時制と結びつくことはない。けれども明日 *aurion* は過去性とあいられない。本来非過去である時制以外にいかなる時制とも(結びつくこととはない)。「明日私は書く *aurion grapho*、明日私は書くだろう *aurion graphso*」<sup>(40)</sup>。

グスターヴ・ウーリツヒのテキストに基づいて翻訳し、注釈をほどこしたフレッド・ハウスホルダーは、『アポロニオス・デイスコロスの命題論』において、

ここに挿入された部分(「」の中)は「副詞について」からとられ、そしてわれわれの『命題論』から失われた数行とよく一致するに相違ない<sup>(41)</sup>。

といいそえる。このようにアポロニオス・デイスコロスは、時間副詞と時制動詞の密接な関係について明確に指摘している。

これを日本語の場合におきかえてみよう。工藤真由美は言う。

時間副詞の存在はおそらく普遍的であろうが現代日本語のような文法的テンスの存在する言語では、単語の語形変化としてのテンスが、中核的である。テンスは義務的であり、時間副詞は任意的なのだから<sup>(42)</sup>。

現代日本語における時間副詞と時制の組み合わせは古典ギリ

シヤ語のそれと異なる。たとえば、「今」についていうと、「今、新幹線の名古屋駅についた」といえるし、「今、そちらへ行く」ともいえる。時間副詞「今」は、現在時制とも過去時制とも共に用いられる。もしも、「今」という時間副詞がはぶかれると、状況がさっぱりわからないので、さぞ困ることになろう。古代日本語、源氏物語の場合は、どうか。鈴木泰は言う。

くケリ形「今、今日、今朝」のような現在を表す副詞と共起した例がない。そしてその一方で、「よべ、さいつ頃、ひととせ」などのような過去を表す副詞と共起した例は多く見出される。一方くケリ形には「昔、先々」など遠い過去を表す時間状況表現（時間副詞、筆者）は多く見出されるが、くケリ形にはそれが少ない。<sup>43)</sup>

Sero te amau. にもどうろう。ラテン語の時間副詞 sero は時制表現 amau に従属し、ただそれを緊密かつ精密に説明するものとして、補完するという関係をもつのかそれともその関係はゆるやかで対等な、たがいに独立した関係をもつ

のか。 amau-sero とはいつのことか。いつからいつまでのことか。過去のいつの時点の経験の現在からの回想をさすのか。それはミラノの一回ないし数回の経験をいうのか、それとも、庭での回心の出来事の現在からの回想をさすのか。述語動詞 amau だけでは、いつのことやらわからない。それゆえ時間関係を精密に述べるために sero を添える。 sero を amau という主人に従属し、 amau という下僕として補佐し、たりないところを補完する必要があるのである。

動詞と副詞の関係は、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』の書き出し「Longtemps, je me suis couché de bonne heure」にもみいだされる。吉川一義は言う。

この言術の核は、言うまでもなく、主語と述語から成る「私は寝た」という部分である。……ところでこのような過去の動作を表出できるのは「長いあいだ」というような期間を明示する副詞とともに動作動詞……複合過去 *passé composé* か単純過去 *passé simple* だけであらう。<sup>44)</sup>

では「長いあいだ」とはいつからいつまでのことをさすのか。吉川は言う。

「長いあいだ」にわたる不眠の夜はその生涯のかなり晩年少なくともタンソンヴィル滞在以降に限定されるはずである。<sup>45)</sup>

それはブルーストの創作活動の原点を表示している。では、アウグスティヌスの場合、*amui-sero*とはいつのことか、あるいは、いつからいつまでをさすのか。ピエール・クルセルによると *sero te amavi* の解釈の流れは岐れる。<sup>46)</sup> ひとつの流れは加藤信朗もいうようにミラノの経験をさす、とみる。いまひとつの流れは庭の回心の出来事をさす、と見る。前者は *peri tou kalou* を核とし、後者は雅歌の新ブラトン主義的な解釈を核とする。それは五世紀のペラのパウリヌス<sup>47)</sup> から十九世紀のサント・ブーヴ<sup>48)</sup> にいたるまで引用されつづけ、次第にゆたかな含意をおびる水脈となった(クルセルは後に教会の画像や写本の挿絵にのこるイコノロジの視点をもたどっている)。ひとは問う。それはいつのことか。いつからいつまでのことか。Kronos に指標をつ

ける。しかし、それにつきるのだろうか。トーマス・マンは、『ヨセフとその兄弟』の冒頭において言う。

Tief ist der Brunnen der Vergangenheit. Sollte man ihn nicht unergründlich nennen?

過去という井戸は深い。底なしの井戸と呼んでいいのではなからうか。(望月市恵、小塩節訳)

ひとつがつける *kronos* の指標の井戸の底にトーマス・マンが覗きこんで、かいまみた深淵、根源的なきが隠れてはいないか。マルセル・ブルーストが、

Rien qu'un moment du passé? Beaucoup plus, peut-être; quelque chose qui, commun à la fois au passé et au présent, est beaucoup plus essentiel qu'eux deux.

単なる過去の一瞬にすぎないであろうか。はるかにそれを越えたものだ。過去にも現在にも共通のものであって、過去と現在の二つよりはるかにもっと共通のなにかだ。(井上究一郎訳)

というとき、いつのことか、とか、いつからいつまでか、というクロノロジカルな時の地平をこえて、根源的な時に触れているのではないか。筆者はフリーデがアオリストについて述べた一節を想起する。

Its indeterminateness now, as we have seen, is understood as the indefiniteness of the distance into the past.<sup>(29)</sup>

## 結論

1. デイオニシウス・トラクスの場合、時間副詞が述語動詞を補完するあいだがある。
2. アウグステイヌスの場合、述語動詞と時間副詞はゆるやかなむすびつきをもつ。

## あとがき

未熟な筆者はストア派の言語論について水落健治氏に貴重な示唆と励ましをいただいた。

第一章はマイケル・フリーデに負うところが大きい。第

二章では、*sero*とはどういうことをいうのか、副詞と述語動詞はいかなるあいだがあるか、という筆者年来の問いにこたえるつもりで、幼稚な答案を綴ってみた。あくまで第二章を第一章の時制論の延長として記すようにつとめた。  
(立教大学名誉教授)

## 註

- (1) Dionysius Thrax, *Technè Grammatikè*, 15. 訳は筆者。テクストは *Dionysii Thracis Ars grammatica*, Gustavus Uhlig (ed.), in *Grammatici Graeci* I.1.3 (Leipzig: Teubner, 1883).
- (2) Harald Weinrich, *Tempus: besprochene und erzählte Welt* (München: Beck, 2001) S.74.
- (3) Augustinus, *De Grammatica: De Temporibus*, 52, in *Abrégé de la grammaire de saint Augustin*, Guillaume Bonnet (ed.), Emmanuel Bernon and Guillaume Bonnet (trans.) (Paris: Les Belles Lettres, 2013) p.22.
- (4) Mike Aubrey, "Occasional Surveys in the History of Greek Grammar: Dionysius Thrax," *EN EPEZO Studies in Greek Language & Linguistics*..., <http://evepheso.wordpress.com>.

- com/2011/11/03/occasional-surveys-in-the-history-of-greek-grammar-dionysius-thrax/.
- (5) Dionysius Thrax, *op.cit.*, 15.
- (9) Priscianus Caesariensis, *Institutiones Grammaticae*, 8. 38. 訳は筆者。テキストは『*Prisciani Institutionum Grammaticarum Libri I-XII*, Martin Hertz (ed.), in *Grammatici Graeci II* (Leipzig: Teubner, 1855).
- (7) H. von Arnim (ed.), *Stoicorum Veterum Fragmenta*, vol. II: Chryssipi Fragmenta Logica et Physica (Stuttgart: Teubner, 1964) 165.
- (8) Rudolf Traugott Schmidt, *Stoicorum Grammatica* (Halle: Eduardum Anton, 1839).
- (9) Michael Frede, "Principles of Stoic Grammar," in *Essays in Ancient Philosophy* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1987) pp.301-302.
- (10) *Scholia Vaticana in artis Dionysianae*, § 14. テキストは『*Scholia in Dionysii Thracis Artem Grammaticam*, Alfred Hilgard (ed.), in *Grammatici Graeci III* (Leipzig: Teubner, 1901). 古注の訳は『クリュシッポス』初期ストア派断片集二』水落健治・山口義久訳、西洋古典叢書、京都大学学術出版会、二〇〇二年による。
- (11) Priscianus Caesariensis, *Institutiones Grammaticae*, 8.51. 以下の訳は筆者。
- (12) Priscianus Caesariensis, *op.cit.*, 8.52.
- (13) Priscianus Caesariensis, *op.cit.*, 8.51.
- (14) Priscianus Caesariensis, *op.cit.*, 8.52.
- (15) "The Stoic Doctrine of the Tenses of the Verb," in Klaus Döring and Theodor Ebert (eds.), *Dialektiker und Stoiker: Zur Logik der Stoa und ihrer Vorläufer* (Stuttgart: Steiner, 1993) pp.141-154.
- (16) Frede, *op.cit.*, p.143.
- (17) Frede, *op.cit.*, p.152.
- (18) 益岡隆志『24週日本語文法ツアー』くろしお出版、一九九三年、五六頁、六〇頁。Gerald Prince, *Dictionary of Narratology*, Revised Edition, (London: University of Nebraska Press, 1989).
- (19) Frede, *op.cit.*, p.146.
- (20) Aristoteles, *De interpretatione*, 9. 山本光雄訳『アリストテレス全集一』岩波書店、一九七一年。
- (21) *Scholia Vaticana in artis Dionysianae*, § 14.
- (22) *ibid.*
- (23) Frede, *op.cit.*, p.153.
- (24) Priscianus Caesariensis, *op.cit.*, 8. 44. 訳は筆者。
- (25) Sara Eco Conti, "Reflections on the verb in Apollonius Dyscolus," *Quaderni del Laboratorio di Linguistica*, 8 (2009) p.2.

- (26) Anthony James Bell, *The Greek Aorist* (N.p. n.d.) 2, <https://archive.org/details/greekaorist00belluoft>.
- (27) Frede, *op.cit.*, p.152.
- (28) Frede, *op.cit.*, p.151.
- (29) Frede, *op.cit.*, p.153.
- (30) 坂部恵「かたり——物語の文法」筑摩書房、二〇〇八年。
- (31) 木村彰一『古代教会スラブ語入門』白水社、一九八五年、一三八—一三九頁。
- (32) 木村彰一、前掲書、一三八—一三九頁。コイネーの挿入は筆者。
- (33) Weinrich, a.a.O., S.123.
- (34) アウグステイヌス『告白Ⅱ』山田晶訳、中央公論新社、二〇一四年、二九六頁。
- (35) 松崎一平『アウグステイヌス『告白』——〈わたし〉を語る』岩波書店、二〇〇九年、二二二頁。
- (36) Cf. Manu Leumann, Johann Baptist Hoffmann and Anton Szantir, *Lateinische Grammatik*, (München: Beck, 1965) 318/4.
- (37) Pierre Courcelle, *Recherches sur les Confessions de saint Augustin* (Paris: De Boccard, 19682) Appendix VIII, pp.441-447.
- (38) Courcelle, *op.cit.*, p.478.
- (39) Dionysius Thrax, *op.cit.*, 24.
- (40) Apollonius Dyscolus, *De constructione*, 3.19.204. テキストは *Apollonii Dyscoli De constructione liber quattuor*, Gustavus Uhlig (ed.), in *Grammatici Graeci* II.2 (Teubner: Leipzig, 1910).
- (41) Fred W. Householder, *The Syntax of Apollonius Dyscolus* (Amsterdam: John Benjamins, 1981) p.160.
- (42) 工藤真由美『アスペクトとテクスト——現代日本語の時間の表出』ひつじ書房、一九九五年、二八頁。
- (43) 鈴木泰『改訂古代日本語のテンス・アスペクト——源氏物語の分析』ひつじ書房、一九九二年、二七七頁。
- (44) 吉川一義「プルーストを読む——長いあいだ、私は早く寝た」『フランス手帖』一〇号、一九八一年、四五頁。
- (45) 吉川一義、前掲書、四八頁。
- (46) Courcelle, *op.cit.*, p.478.
- (47) Courcelle, *op.cit.*, p.465.
- (48) Courcelle, *op.cit.*, p.470.
- (49) Frede, *op.cit.*, p.153.